

## 令和 2 年度第 1 回県立高等学校みらいのあり方検討委員会 概要

日時 令和 2 年 10 月 13 日（火）9 時 30 分から 12 時 20 分まで  
場所 三重県庁 7 階 教育委員室

【論点】これからの時代を生きる子どもたちは高等学校においてどのような学びをするべきか。

- 高校は、社会に出て苦境に陥った時になす術がないと諦めず、自分の力で他人に助けを求めたり技術を使って解決していけることを訓練できる場であるべきだ。  
自分の高校時代における高校とは、正解か不正解かを判定される、正解を求める場であった。しかしながら、社会に出た時に真に必要となるのは、「正解か不正解か」の二者択一ではなく、今ある状況をどのように改善し成長していくかという「答え」を考え出していくことである。その意味では、答えは一つだけではなく複数あるし、より良い答えを作り続けていくことができる。今立っているところにも小さいかもしれないが答えは必ずあるということを知ることができる教育があると良い。
- 自分は自分で守るという意味でも自己肯定感は重要であるが、日本人の自己肯定感の低さが問題である。高校生の評価軸は、テストの成績であったり「か×か」であったりなど単一的かつ偏りがちになっていると感じる。様々な面で一人ひとりを肯定でき、自分を肯定する力を自分でも他人からも育てられる場であってほしい。
- 子どもたちが誰一人取り残されないようにすることが必要である。外国籍や外国にルーツを持つ子どもたちの場合、小中学校では担当の教員間での交流や研修がたびたびあり、教員からの支援が受けやすい。一方で、高校になると、今までそういった子どもに関わったことがないためどのように接すれば良いかわからない教員が多く、結果として、置いていかれてしまうことがある。高校においても、日本語指導だけでなく、勉強に遅れている子どもが自信を持てるような支援を行っていくことが大切であり、そうしたことが外国人の子どもたちが自信を持つこと、自己肯定感を育むことにもつながると思う。また、「日本人」、「外国人」の別なく、互いを理解し、文化の違いを肯定しあい、同じ学校の生徒として互いに関わっていけるようにしていく必要がある。
- 外国籍等の子どもへの支援について、通訳を導入するなど少しずつ学習支援を進めている高校も増えてきている。ある程度日本語ができて一般の入試で入学する外国人の子どもも多いが、日本人の子どもに比べるとどうしても語彙力などが低いので、高校でも日本語指導をする必要がある。  
外国籍等の子どもに係る入試特別枠のある学校も増えてきているが、「来日 6 年以内」

といった制限が設けられており、制限年数を超過した子ども、例えば日本生まれの子どもは対象外、また15歳以上で来日した学齢超過の子どもについては、高校を入学するための勉強をする場がないなどの課題がある。

- 「学ぶって楽しい」、「生きるってまんざらでもない」といった生きることの根幹を感じられる場面が高校にあると良い。ここに最短で辿り着くにはこんな努力・効率的な学びをした方が良いというような、子どもたちを未来社会に合わせていく逆算式ではなく、子どもたちが未来社会を作っていくという本来の前提に立って考えることが必要ではないか。

また、育ちのスピードは人それぞれ異なるのに、高校1年生はこの段階まで、2年はここまで、3年はここまでと、生徒は否応なくそうした指導の形に合わされている。一人ひとりの育ち・成長に応じた学びがあると良い。

- 高校生を対象とした就職採用セミナーで「就きたい仕事があるか？」と聞いても、子どもたちはなかなか答えられない。それは、どんな仕事があるのかを知らないためであり、知らないものは選べないということである。

いまの高校における職場体験は少ないと感じている。四日市工業高校のものづくり専攻科は2年間で約50の職場を体験することから、生徒も就職する会社をイメージしやすく、選びやすいと聞く。また、これからは一人一社ということではなく自由応募に変わっていくと思うが、そうなると、これからは高校も大学と同じになり、高校を卒業してニートとなる子どもも出てくる。今まで高校の教員は、全員を就職や進学させることをゴールとしていたが、高校生も就職をシビアに考えていく時代になるので、いかにより多くの会社を見せていくかということ、学校で得られる体験の一つとしていくことが重要である。

- クラス数が減ってきている学校においては、1クラス10人といった少人数クラスをあえて作っていくというのもアイデアかなと思う。

- これからの高等学校教育を考えるにあたっては、各委員において、高校時代のどのような学びや体験が今につながっているのか、意味があったのかを紹介してもらいたい。また、「どうあるべきか」を議論する際には「今どうなのか」をしっかりと見ておく必要がある。今をどうしていくにはどんな方法があるかを考えることが必要である。

三重県をどうしていきたいかを考えるためには、三重県の高校の現状や生徒の満足度、学習がどういう形で進められているのか、その効果はどうかといった検証がないと議論が具体的ににならないのではないかと。

- 先に出た、他人と協働しながら、自ら課題を解決していく力とは、国でも議論されていた「学び方を学んでいるかどうか」に関わるものであり、新しい学習指導要領では「探究」的な学びが特に高等学校において全面展開されることになる。

自ら問いを立てて、立てた問いにさまざまな方法を使ってアプローチする中で、できないで終わるのではなく、「できない」の前に「一人では」「今までの方法では」「今はまだ」というように言葉を付け加えるようにする。「ものを考えて解決するための方法」を身につけなければいけない。学習指導要領の主眼は知識を持っているだけでなく使うことをどうやって体験的に学ぶのかということだろう。

- 大学進学を目指す学校の話になるが、受験がゴールという空気感があり、いかに良い大学に行くかという感覚だった。受験までに各教科に必要な点数を取るために、どの時期にどれくらい勉強したほうが良いか、また各教科で得点するためにどの分野をどれくらい勉強すべきかなど、一つの課題を構造的に分解・把握して取り組み、テストの結果から方法を修正していくという力はついた。ただ、そもそも課題を設定することはしてこなかったのが、大学以降苦労した部分はある。
- 45年ほど前の話だが、私の母校では生徒が好きなことを好きなようにしていて、先生も何も言わない学校だった。進路指導やキャリア教育などもなく、のびのびと生活して特に大学に行って何をしたいというものもなかった。その中で培われたものは、自分で考えて動くということ。特に今の仕事していくうえで一番役に立ったのは多様な人とつながることができたことである。高校は社会の縮図で、さまざまな人と出会う場であり貴重な場だった。一志学園高校に通う子どもたちの大部分は不登校を経験している。そうした子どもの自己肯定感を上げていくにはコツコツと小さな成功体験を積み重ねることが必要であるが、学校の先生より地域の方に褒められたほうが嬉しいという子どももいる。いろいろな人と接する機会をたくさん持てた方が後の人生に役に立つと感じている。
- 私の母校では、海外のニュースサイトを使ったり、スカイプでオーストラリアの学生と話しをしたり、クリエイティブな授業をたくさんしてもらった。生徒は限られた3年間の中でしなければならないことがたくさんあるので、一つ一つの挑戦が一度きりのチャレンジで終わってしまいがちになるが、自分の高校では何回も失敗してもその先の改善を考えチャレンジする機会を作ってもらえたのが良かった。

3年間でさまざまなことにチャレンジし、多様な人と関わる経験は、自分の将来を作るうえで大事なことであると感じる。
- AI技術の進歩など社会の変化の中にあっても、高校の役割として変わる部分と変わらない部分があると思う。変わらない部分としては、文章や情報を正確に読み解く力、コミュニケーション力を身につけることはAI技術が発達してもそれらを使いこなす上で必要なものである。生徒の現状を見ると、スマホが普及・発展したことで、ネット上の文章を容易に引用して文章を作り、瞬時にものを伝えられることから、きっちり文書を作り、正確に話すという力は不足しがちだと感じる。

実習等を通して人と触れ合い、人の気持ちを考える仕事を少しでも経験すると生徒

は大きく成長する。教員がいくら教室でがんばって伝えても付いていかない力である。人間的なつながりを大切にすることによって人間的な力を身に付けていくといったやり方がこれからはますます必要であると思う。

現行の「県立高校活性化計画」にもアクティブラーニング、主体的・対話的な深い学びがうたわれているが、学校現場でも少しずつではあるが進んできていて、教員が黒板の前で授業するだけでなく、グループディスカッションなどを取り入れて考える授業も行っている。電子機能付き黒板が導入されたことで書き写す時間を少なくし、少しずつ話したり考えたりする授業が増えつつある。

○ インターネットを通して何でも知ることができる時代になったが、知るということと実際に行うことは異なるので、学校の役割としては、実際の経験を積める場である部分にウェイトを置くべきである。

○ 当時は外国籍等の子どもは定時制高校しか行く場所がなかったので、自分も定時制高校に進学したが、そこで日本語を学ぶことができ、大学にも進学することができた。定時制は一クラスの人数が少なかったため教員が身近で相談しやすく、他の生徒との交流も大事にされており、自分の居場所があると思えた。

高校にいけば先生が一人の人間として大事にしてくれて、友達が支えてくれるので自分もがんばろうと思える、そういう居場所としての高校の存在は非常に重要だと思う。どこの高校であってもスチューデントファーストで、生徒一人一人を大切にしてくれることが子どもたちの自己肯定感を育てることにもつながると思う。

○ 個別最適化とはある一定の決まったやり方があるものではなく、子どもたち一人一人にあわせて対応していくということであるが、一定のやり方に陥る傾向が学校の中にはあり、それが結局のところ画一化を生むことになる。

こうした画一化が生まれる背景には、一人の教員が見る生徒数が多いなど条件的な部分がある。そういった条件面での改善・整備も合わせて考えていかないと、言葉だけが美しく飾られて実質何も変わらないのではと思っている。

○ 私の母校では総合探求を実践しており、そこでティーチング・アシスタントとして教育現場に入るなかで感じるのが、一部の生徒は自分で興味を持って動くが、その他大多数は「正解」を探して先生に評価してもらえそうな無難なものを当てはめるような形で取り組んでいるように感じられた。こうした状況では、ディスカッションの場でも議論が活性化しないし、それを支えるはずのティーチング・アシスタントも各クラスに一人という状況のためフォローしきれない。社会に出る前に挑戦し、成功や失敗をするなかで力を付けていくためにも、本来であれば、こうしたディスカッションの場などを通じて失敗経験を積めること、また、失敗しても生徒一人一人をサポートできるような存在が教員以外で担保できるようにすることが必要ではないか。

スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の枠組みの中でティーチング・アシスタ

ントの仕組みを採り入れている。とは言え、研究費に予算の大部分が使用されている状況である。こうした取組をはじめてまだ2, 3年であることから、卒業生を中心に大学の掲示板を活用するなど、手探りでティーチング・アシスタントになってくれるボランティアを集めている状況である。

【論点】子どもたちの学びのために、高等学校は子どもたちにとってどのような存在であるべきか。

- 一部の生徒にとって興味関心があることでも他の生徒にとってはないということはある。しかし、興味関心のないことでもやるべきことはあることから、その「やるべきこと」を生徒が理解・納得ができるようになるかというところに時間がかかる。そのために、多様な人材、地域の方々の活用も含めて、学校をどのように作っていくのかということが大事であると思う。  
さらには、そうした学校を支えるために教育委員会、教育行政がどうあるべきかということなしには議論は進まない。学校がどうあるかという背景には教育委員会の意向が強く影響するものであり、まずは教育委員会のあり方を考えるべきであるというのは中教審でも多く出されている意見である。三重県においては、いち早くそこを考え、教育委員会が学校を支えるという部分を出していけると良いのではと思う。
- 自分で課題設定をしたり、興味あることを見つけ、主体的に動く子どもを育てるとするのはたしかに重要であるが、高校生の段階でそんなことを求めるのは無理ではないか。私たち大人であってもどんな課題設定をしているのか、何に興味があるのかと聞かれてたら答えられない。高校生に期待しすぎではないかと思う。  
また、グループワークやディスカッションなどのインタラクティブな教育が良いというのもその通りであるし、その方向に行くべきだとも思うが、こうしたことをやっていくうえで一番大変なことは、それをやっていける教員を養成していくことだと思う。  
高校に招かれて生徒とグループディスカッションをする機会もあるが、建設的な意見が出てきてディスカッションがうまくいったという経験はほとんどない。  
こうしたことを子どもたちに求めても難しい。むしろ教える側がどのようにディスカッションをリードすれば子どもたちがより発言し、素直な気持ちで話ができるのか、ディスカッション、グループワークの仕方を教えられるよう教員に対するの教育をはじめべきではと思う。  
海外の大学での経験をふまえると、学生による議論が活発に行われるには、それをリードする教員の力量が重要であり、どのようにすれば興味を持って発言をするか、どのような切り口で発言をはじめれば良いのか、どのようにすれば切り口を見つけることができるかということステップ・バイ・ステップで学生に経験させている。こうしたことができる教員を養成することがとても重要であり、子どもたちにこうしたほしいなと考えるだけではなかなか実現していかないのではと思う。

○ たしかに、深く考えることなしに課題を子どもたちに投げかけても、子どもたちから意見を引き出せないというのはよくあることだと感じている。どの切り口でやると活発な意見が出るのか、生産的な議論ができるかということ、教員が考え抜くこと、そうした力を教員が持つことが重要である。

○ こうでなければならないという「やり方・形」が先行し、それにあわせていくように、とにかく話しあえば良いというのでは意味はない。まずは生徒たちの興味を引き出していくという部分に多くの時間をかけながらやっていくということが大事である。そのための方策の一つとして、年の近い大学生や大学院生をティーチング・アシスタントとして呼んでくるということもやってみた。やってみてその効果を検証していくという考え方が大切だと思う。

対話的な学びというものには、先哲の考えに基づいて行うということ、すなわち読書を通して自己内対話をするということも含まれる。こうした意味で、自分で考えることを引き出す授業というものは、実は以前からも教員の中で実践されてきたものである。今までのやり方がすべてダメと否定するのではなく、良かったところは伸ばし、そうでなかったところは改善していこうと考えることが必要である。だからこそ、現状を見ること、今がどうなっているかを検証することが大事である。

○ 学校でディスカッションをやっていくというのは緒に就いたばかりで、教員たちは限られた時間の中でさまざま工夫しながらやっているところであるが、たしかに、教員が生徒たちの話を引き出し、議論を回す力はまだまだ発展途上と感じる。

○ 一志学園高校に通学している子どもたちの中には、対話的な授業というのは特に苦手としている生徒も多い。こうした中で、教員たちが気を付けているのは生徒の人数である。少ない人数だと教員もコントロールしやすいし、生徒も安心して話せる。これまでの意見にもあるように、教員の力量による部分は大きい、教員たちも本当に多忙な状況で対話的な授業も充実させていくというのは非常に難しいと感じている。

ある高校でやっていることを他の高校でもやれるかという部分は難しいところもあると感じる。「ようこそ先輩」のように、学校に先輩がやってきて、少人数グループで話をする機会があるが、非常に議論が盛り上がる。こうしたやり方も効果的なやり方ではないか。

○ 昨今の新型コロナウイルス対応でオンラインを活用する機会が増えた。こうした中で、子どもたちの出会いの授業をどのようにやっていくかを考えたときに、オンラインで外部の人と双方向的につながり交流していく機会が増えていけば良いと感じる。

子どもたちは大人になりかけている部分ですごく揺れているが、高校によっては、一人ひとりの生徒に担当の教員が付いて生徒の話を聞くなど、学校の中で信頼できる人を作る、つながりを生む取組をしているところもある。こうした結果として、子

もたちも安心して、学校の中で居場所を作っていけると思う。

- 少人数での授業というのは現状のままでは予算的な関係、教員の負担の関係もあって難しい。外部の専門的な人材を入れることなど、現状において何ができて何ができないかを具体的に考えていくことが必要ではないか。

自分の周りにロールモデルを見つけられずに、将来のことを具体的に思い描きにくい子どもにとって、先輩と交流することは重要だと思う。オンラインも活用しながら、ロールモデルとなりうる大学や社会、海外で活躍している先輩などとの交流を進めていけるようにしていけたら良いのではないか。

- 人との出会いもオンラインでできる時代だからこそ、経験、特にアナログでの経験は大切である。こうした経験を得る機会を充実させていくためにも教員の力量を上げていくことは重要である。

- この委員会は、子どもたちや学校の課題を解決していくためのアイデア・意見について各委員の経験をふまえ議論していくという形であるが、今回の課題はどうしても意見が広汎に及びやすい。第2回会議以降は個別の課題を設けてやっていく形にすると、各委員も意見を絞りやすいのではないか。

- 自分の高校時代の経験を踏まえると、高校ではやりたいことは何でもやらせてもらえ、複数の部活を掛け持ちする中で、いろいろなことを同時にやっていく力を身につけることができた。また、いろいろな先生と関わり相談することで、自分にあった先生を見つけていくということもできたと思う。

自分は大学でのアルバイト経験で学ぶことが出来たが、就職するか進学するかの二者択一、働くにしてもどこの企業でというのではなく、いろいろな生き方があるということを経験時代に知ることができたよかったですと思う。

- 岡山県立和気閑谷高校の生徒の進路は、就職が約3分の一、専門学校進学が約3分の一、大学進学が約3分の一と多様で、不登校経験があったり、家庭に事情を抱えている生徒も一定数通っている学校である。

授業等を通して、学校外の人と出会う機会が多くなるよう計画しており、総合的な時間だけでなく福祉や商業の科目の中でも街の人と一緒に何かをする授業やボランティアも奨励し、外に出ていくことを勧めている。こうして外部の大人と関わることで、その街の良さに生徒が気づき、また、大人になることを前向きに感じるにつなっている。

さらに、和気閑谷高校では、大人だけでなく年下の子どもとの交流ということで、高校近隣の小中学校の放課後学習の支援にも行っている。自分より年下の子どもとの出会いを通して、その場に合わせたいろいろな役割を経験するということは、外部の人と出会うこと以上に大事にしなければならないのではと考えている。高校に現在あ

る仕組みの中でもできること、経験できることはたくさんあるので、そうしたことに光を当てていくことも大切であると思う。

- さまざまな人とつながる体験活動をしていくと、どうしても生徒によって反応が異なり、個に応じた対応が必要になってくる。授業の中でディスカッションをしようすると、40人を一人の教員で見えていくことは非常に難しい。

今後、生徒たちの就職に向けて、また、キャリア教育の中でいろいろな仕事を見ていくという中で、例えば、看護師や作業療法士の仕事内容などは教員では生徒に伝えきれない部分が出てくる。いろいろな外部の人の力も得ながら、子どもたち一人一人に応じた教育をしていくというのが、これからの学校の在り方でないかと思う。

- 外部の人と関わっていくにあたって、教員自らが興味を持ち、外部の人とつながりを持つなど、教員自身がどのように関わっていくかが問われると感じている。

しかしながら、教員の多くは多忙であり、やらなければならない他の業務を抱える中で、この委員会で私たちが議論してきたような話にはなかなかならないのではないかと。こうした状況では、どれだけ議論をしても絵空事にしかならないのではと思う。

現実的に教員がどのような業務に時間を割いているのか、その業務は外部人材に代替できないのかなど、教育委員会が本腰を入れて教員の働き方改革を進めていかないとうまくいかないのではと思う。

- 教員の力量という部分もあるが、それぞれの学校の目指すところや一人ひとりの生徒が必要とするものは異なる。例えば津高校や四日市高校ではより難関の大学に合格できるような授業を、職業系高校では職業系高校ならではの授業を、高校で学ぶ様々な背景を持つ生徒一人ひとりに必要とするものがあると思うので、広く「三重の高校」について考えても、すべての高校や生徒に当てはまるような議論はしにくい。

- いろいろな高校がある中で、高校を一括りに議論していくのは難しい。

- 学校ごとに方針や生徒の目指すところが異なる中で、県立高校の教員は転勤が多く、かつ一つの学校における在職の期間が短いのではないかと感じる。教員自身がやりたいことができるように、その教員に合った学校への赴任ということも考えていく必要がある。

- 多文化共生や外国人の受験などを一生懸命やっている教員が転勤してしまうと、その学校の取組が一気に下火になってしまうなど、教員個人の熱意が大きく影響することから、転勤にあたってはその教員がやりたいことを重視してほしいと思っている。

- 学校ごとにそれぞれの良さがある。どこに重きを置くかは学校ごとに違って良いと思う。どこの高校でも同じことばかりやるのではなく、中学生が自分に合った高校を

選択しやすくなれば良いと思う。

- 条件整備は県教委が考えるべきことであるが、その一方で、その学校をどうしていくかはその学校の教員や生徒、保護者で考えていくべきことであると思う。

これまでは、学校のことは学校の関係者で考えていくという意識は少し弱かったのではないかと思う。これからは教員、生徒、保護者においてこうした意識を持てるようにしていければと思う。

- これまでの学校ごとにめざすところを明確にしていくという議論は、中央教育審議会で現在議論しているスクールポリシーに関するものである。中教審が高校に関してどのような議論をしているかについては、次回会議において事務局から改めて説明してもらえれば、今後の議論がより建設的になっていくのではないかと思う。